

聖書：マタイ 27：11～26

説教題：バラバか、イエスカ

日時：2020年9月13日（朝拝）

今日の箇所にはイエス様がローマ総督ピラトのもとで裁判を受けた時の様子が記されています。当時の世界の支配者ローマは被征服民族に対して寛容な政策を取りましたが、死刑執行権はローマにのみ属することとされました。そこでイエス様を殺したいと考えるユダヤ人のリーダーたちは、まずユダヤの裁判でイエス様を断罪した後、ローマ総督のもとへイエス様を連れて行って、そこで死刑判決を受けさせようとしています。しかしそのためには今までと同じ訴えでは目的を達成することができません。ユダヤの裁判では26章65節で見たように、神への冒とく罪をもってイエス様を有罪としました。しかし同じ信仰を持っていないローマ人にはこれでは死刑判決を下す理由にはなりません。そこで彼らは訴えの内容を変えます。11節で総督はイエス様に「あなたはユダヤ人の王なのか」とまず問うていますが、これはユダヤ人の訴えを受けたものと考えられます。平行記事のルカの福音書23章2節を見ると、彼らはこのように訴えたことが分かります。「この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」一言で言えばローマにとって脅威的な存在であると訴えたわけです。「この者はわが民を惑わし」とは、ユダヤ人の間に混乱を生じさせているということ。「カエサルに税金を納めることを禁じ」は、イエス様が決して言っていないことですが、捻じ曲げたのでしょう。そして「自分は王キリストだと言っている」とは、ローマ皇帝に対抗しようとする危険分子だ！という訴えです。そこでピラトは「あなたはユダヤ人の王なのか」と問うたわけです。

これに対してイエス様は「あなたがそう言っています」と答えられました。この答え方は前にも出て来ました。26章64節で大祭司カヤパが「おまえは神の子キリストなのか」と問うた時、イエス様は直訳すれば「あなたが言いました」と答えました。その時と同じように、イエス様はここでも問われたことについて否定してはいません。しかしだからと言って素直に同意してもいません。なぜそうなのかと言えば、カヤパの時と同じように、ピラトがこの言葉で考えていたことと、イエス様がこの言葉で考えていたこととの間には食い違いがあったからでしょう。イエス様は確かに神の民ユダヤ人に神が送られた王です。この福音書冒頭の系図はそのことを示しています。またイエス様はエルサレム入城の際、ろばに乗ることによって、そのことを示されました。しかしピラト

が考えているように、ローマ皇帝に対抗するこの世的、地上的な王を意味してはいません。イエス様の王権の性質についてはピラトとの間にやり取りがなされたようです。そのことはヨハネの福音書 18 章 34～37 節に記されています。イエス様はそこで「わたしの国はこの世のものではない」こと、もっと靈的な性格のものであることについてピラトに話されました。

さてイエス様はピラトの問いにはこのように答えられたものの、祭司長や長老たちの訴えには何もお答えにならなかったと 12 節にあります。これについてはピラトも非常に驚きました。通常このように責められて何も答えなければ断罪されるだけです。普通は自分を救い出すために弁明します。しかしイエス様は口を開きません。ピラトは 13 節で「あんなにも、あなたに不利な証言をしているのが聞こえないのか」と言って、何か応答するようにと促しますが、どのような訴えに対してもイエス様は一言もお答えになりませんでした。それは 26 章 62～63 節でも見ましたように、イエス様をご自分を救い出そうとはされなかったからです。私たちの身代わりを果たすためです。イザヤ書 53 章 7 節：「彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」 イエス様はその時が来たことを知られて、この預言に従って口を開かず、ご自分をささげ切っておられたのです。私たちが思うべきは、イエス様はやがてすべての人をさばく真のさばき主であるということです。その方がここではこうしてさばかれることを良しとされた。ご自分を低め、口をつぐみ、不当な訴えを耐えて受け止め、十字架へ引き立てられて行くことに向かってご自分をささげ切っておられた。私たちは私たちの救いのためにこのように行動された主のお姿と、その心にあったこととを、ここで良く心に留めておきたいと思います。

さてピラトはこのイエス様の姿に非常に驚きました。そしてこの人には責められているような悪は何もないこと、むしろこれまで見たこともない人格を見ることによって畏敬の念さえ覚えたことでしょう。そしてそれと反対に騒ぎ立てるユダヤ人のリーダーたちに対する一層の反感を持ったことでしょう。そんな彼は何とかしてイエス様を助け出そうとします。彼はローマの裁判官なのですから、自分が正しいと思ったことはその通りに言えばいいのです。確信している通りに判決を下して良いのです。しかし彼はその道を行きませんでした。彼はこの地に派遣されている地方総督です。なるべく事を荒立てず、現地の人々から評価され、うまくこの地を治めている役人としてローマからの評

価を得る者でありたい。そこで妥協の道を進もうとします。ピラトが取った道はいわゆる恩赦によってイエス様を解放するという道でした。時はユダヤ最大の祭り、過越の祭りの時です。ローマから彼らへのご祝儀として、彼らが望む囚人を釈放するという慣習が当時あったようです。そこでピラトは「おまえたちはだれを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」と人々に問います。バラバとは名の知れた囚人でした。ルカの福音書には「都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入れられていた者」とあります。ピラトがこのように民衆に問うたのは、ユダヤ人のリーダーたちがねたみからイエスを引き渡したことを知っていたからであると18節にあります。民衆にこの二人のどちらを釈放するかと問えば、民衆は極悪人バラバよりはイエスを！と願うに違いない。そうすることによってリーダーたちの訴えを引っ繰り返すことができる。そのようにピラトは目論んだわけです。

そしてこの時、妻からの警告の言葉もピラトに届いたと19節にあります。「あの正しい人と関わらないでください。あの人のことで、私は今日、夢でたいへん苦しい目にあいましたから」と。これは必ずしも神からのお告げと見る必要はないと思います。彼女はイエス様の正しさを確信して、間違ってもこの人を有罪にははいけなないと心の中で深く思っていた。そのことが夢にまで出て来たのです。そして普通ではなかったことと思いますが、裁判中のピラトのもとに人を遣わして警告するほどでした。

ところがでした！話は予想外の方向へ進みます。祭司長たちはピラトがこの提案によってイエスを救い出そうとしていると察知したのでしょう。バラバを釈放し、イエスを死刑にするようにと群衆を説得します。その結果、総督が21節で「おまえたちは二人のうちどちらを釈放してほしいのか」と問うと、彼らは「バラバだ」と答えます。色々な声が上がったのではなく、「バラバだ！」という声がユニゾンで返って来たのです。なぜそんなことになったのでしょうか。群衆の前にはユダヤ人のリーダーたちの意見に賛成するのか、それとも異邦人ローマの役人の意見に賛成するのかという二つの選択肢が示されました。この構図においては、特に愛国的ムードが高まる過越の祭りの時、ローマ人に味方するという選択は彼らになかったと思われまます。ローマの支配への抵抗の意志も込めて、ユダヤ人のリーダーたちの言葉に同意し、みなが一つの声となってピラトに答えたのでしょう。

ピラトはうろたえつつも何とかしてイエス様を救い出そうとします。22節では、バラ

バを釈放するとしても、キリストと呼ばれているイエスをどうすべきかと問います。すると群衆からは「十字架につけろ」という驚くべき答えがまたしてもユニゾンで返って来ました。祭司長や長老たちの説得によるものでしょう。ピラトはなおイエス様を弁護しようとしみます。23節では「あの人がどんな悪いことをしたのか」とまで言います。彼としてはイエス様に何の罪も認めない。もし何か悪いことをしたというなら、それをあげてみよ！と言います。しかし群衆はその問いには応じず、ますます激しく「十字架につけろ」と叫び続けるばかりでした。

ピラトはこれではもう手に負えないと判断します。もはやイエスを助け出すことは不可能であると断念します。ヨハネの福音書19章12節を見ると、ユダヤ人たちはイエス様を釈放しようと努力するピラトに向かって、こう叫んだと記されています。「この人を釈放するのなら、あなたはカエサルの友ではありません。自分を王とする者はみな、カエサルに背いています。」この言葉を聞いてピラトは恐れ、心を決めたようです。このまま暴動が起こったら自分の首も飛ぶかもしれない。そこで正しくない知りながら、イエス様を犠牲にすることに目をつぶることにしたのです。彼は水を取って群衆の目の前で手を洗い、私にはこの人の血について責任がないというジェスチャーをします。すると人々は「その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に」かかっても良い！と無責任な、この場限りの言葉を発します。こうして26節にあるように、ピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架につけるために引き渡しました。ちなみにこのむちは、革のひもに金属片や骨が付いたもので、それで打つと肉を引き裂き、骨が現れたり、内臓が見える状態にまでなったそうです。これは刑執行の前にその人を弱らせるためのものでしたが、これで命を失う人もいたようです。言葉に絶する扱いをイエス様はこの時、受けられました。そして十字架刑へ引き立てられて行ったのです。

以上の箇所を私たちはどのように読むべきでしょうか。私たちは祭司長や民の長老たちがいかにひどい振る舞いをしたかをここに読んで、彼らを憎み、忌み嫌うことがこの箇所の目的なのでしょう。あるいは群衆が民のリーダーたちに説得されて、皆で声を合わせてイエス様を十字架につけろと叫んだ姿に、愚かな群集心理の実例を見て批判すれば良いのでしょうか。あるいは義を行うべき裁判官ピラトが保身のため、不正な判決を下したことに怒り、さらには権力者たちに対する不信の目を持つことがこの箇所の目的なのでしょう。確かに今見た三者それぞれに責められるべき点があります。しかし

だからと言ってここに登場する誰かにただ怒りや不満を覚えて、この箇所を読み終えてはならないと思います。このピラトの前での裁判が示していることは何でしょうか。それはローマの裁判官によってはっきり正しいと認められた人が死刑に処されたということです。この人にどんな罪があるのか、この人に罪はない！と公に宣言された人が十字架刑へと引き立てられて行った。その意味でこの裁判は明らかに不正に進行しました。しかしまさにこのプロセスに神の救いの奥義が示されていることを教会は読み取って来ました。

この裁判はイエス様の死がご自分の罪のための死ではないことをはっきり示しています。つまりその死は誰か他の人のためであった。何度も何度も正しいと確認された方が十字架にかけられる。なぜこのようなことを神は許されるのかとある人は思うかもしれませんが。しかし神はここに罪ある私たちを救う方法を示しておられます。すなわち正しい方が私たちに代わって罪ある者とされ、罰されて行く。ですからもしなぜ正しいイエス様が十字架につけられなければならないのか、誰が責められるべきなのかと問うなら、私たちはまず自分の罪を思わなければなりません。誰のせいでこうなったのかと問うて、祭司長や群衆やピラトを責め立てるのではなく、神がこうされたのは実にこの私の救いのためだったのだと見て、この神の方法の前に恐れおののく者でなければならないのです。

この神の救いはバラバの釈放に象徴的に示されています。彼はさばかれるべき罪人でした。救われる望みのなかった人でした。注解者の中には、この日の朝、死刑執行のために用意された3本の十字架のうちの一つは、このバラバのためだったのでは？とコメントする人もいます。イエス様の右と左に強盗が付けられたと聖書は記していますが、単に盗みをしただけで十字架刑に処されることはなかったようです。「強盗」と訳されている言葉は、「反逆者」とか「反乱者」を意味する言葉で、同じ言葉はヨハネの福音書18章40節ではバラバに対しても使われています。ですからあの二人の強盗は反乱者たちであり、バラバもそうでした。またマルコの福音書ではバラバは暴動で人殺しをした他の暴徒たちとともに牢につながれていたと記されていますから、イエス様の右と左につけられた強盗はバラバと一緒に捕らえられた者たちだったかもしれません。そして本来はバラバもこの日、彼らと一緒に十字架につけられる予定であった可能性が十分にあると言われています。いずれにしてもこの日、バラバは自分が呼び出されたと思ったら、まさかの解放が与えられました。そしてまるでその代わりであるかのように、何度

も正しい、また罪がないと言われていた人が十字架刑へ引き立てられて行きました。あまりにも不思議なことです。あまりにもおかしいことです。どうして罪ある私が釈放される一方で、罪がないとあそこまで言われた人が刑場へと歩いていくのか。しかしこれが神が私たちを救う方法なのです。そしてこのためにこそイエス様は今日の箇所でも黙っておられたわけです。私たちの身代わりとしてさばかれるために、正しい方であるのに口を開かず、十字架につけられることへと向かって自ら進んでくださったのです。

私たちはこの裁判が不正に進行したと見えることの内に、神が驚くべき奇しい救いを私たちのために用意くださったことを見て、神をあがめ、またご自身をささげてくださいましたイエス様の前に感謝してひれ伏したいと思います。そしてイエス様が備えてくださった尊い救いを受け取る者でありたいと思います。私たちはこの裁判の経過にやるせない思いを抱くかもしれませんが、こうでなければ私たちの救いはありませんでした。これは神が私たちのためにしてくださったことです。私たちはバラバに自分を重ね合わせつつ、私たちの身代わりに十字架へ進まれたイエス様を見つめて、おののきつつ、心からの礼拝をささげたいと思います。そして神の恵みにより、イエス様を通して、罪を赦され、救われ、永遠の命をいただくことにまで至る幸いを受け取る歩みへ導かれたいと思います。